

令和 5 年 4 月 5 日現在

機関番号：28003

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12390

研究課題名(和文)日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究

研究課題名(英文)Basic research on methods for collecting and accumulating large volumes of linguistic materials on endangered languages in Japan

研究代表者

麻生 玲子(Aso, Reiko)

名桜大学・国際学部・准教授

研究者番号：20810667

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、消滅危機言語が話されているコミュニティメンバーと研究者が協力し、持続可能な形で行える言語資料収集(録音)方法の検討を行った。全体の成果として3つ挙げる。(1)研究者のこれまでの調査内容と効率の関係を数値として示し、(2)琉球地域等における、コミュニティメンバーによる言語資料収集の実験を行うことで、要望の掘り起こしを実施した。(3)それらの結果を整理・検討し、論文あるいは語彙集としてまとめた。論文中には、新たな調査法として、ハイブリッド遠隔型の調査法を提案した。今後はこの調査法の効率や効果を実証することが課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本の消滅危機言語を対象とした大量のデータ収集・蓄積方法に関する基礎研究を行った。人類の言語認知や言語習得といったメカニズムの解明には、言語の多様性の記録が不可欠である。しかし、日本を含み、世界では多くの言語が消滅の危機に瀕している。従って、言語の多様性の記録は急を要する。これまで言語資料の収集・蓄積は、主に研究者が主体となって行ってきた。将来的にも研究者が主体となり、消滅の危機にある言語・方言の資料収集・蓄積を行う場合、収集可能な言語資料の量と収集期間に期限がある。本研究はこのような状態を打開するための基礎研究だと言える。

研究成果の概要(英文): In this study, community members and researchers working together in communities where endangered language are spoken explored methods of collecting (recording) language materials that can be done in a sustainable manner. The following are three overall outcomes of the study. (1) The relationship between the content and efficiency of the researcher's research to date was demonstrated numerically. (2) community members in the Ryukyu region and elsewhere experimented with collecting linguistic materials to uncover their needs. And (3) the results of these experiments were organized and examined. The results were organized and discussed, and compiled into a paper or word list. In the paper, we proposed a hybrid remote survey method as a new survey method. The future task is to demonstrate the efficiency and effectiveness of this survey method.

研究分野：言語学

キーワード：危機言語 調査法 メタ研究 資料収集 資料蓄積

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

日本を含み、世界では多くの言語が消滅の危機に瀕している。人類の言語認知や言語習得といったメカニズムの解明には、言語の多様性の記録が不可欠である。従って、言語の多様性の記録は急を要する。申請者はこれまで、消滅危機言語の1つである南琉球八重山語波照間方言の記述研究を行ってきた。一方で、消滅危機言語の研究の将来は明るくない。理由は次の2点である。

- 言語資料の取扱い作業には時間がかかるため、短時間での資料収集・蓄積が不可能である。
- グローバル化やメディアの影響により当該言語が次世代に継承されず、言語資料の収集に限りがある。

このような状況の中、記録されることなく消滅する言語が今後増加すると予想される。

### 2. 研究の目的

本研究では、日本の消滅危機言語を対象にし、時間に限りがある中でも多くの言語資料を効率よく収集・蓄積できる方法を研究する。本研究は記述言語学分野のメタ研究（研究方法の研究）の実施と言い換えられる。

### 3. 研究の方法

本研究は次の2つの点から実施される。

- 従来、研究者が使用している調査方法ではどの程度の量・質の言語資料が収集できるのか、文献や実際の調査における調査時間と収集語彙数などの情報を収集し、定量的に分析を行う。
- 消滅危機言語が話されている地域において、地元コミュニティあるいは個々のメンバーにどのような要望があるのかニーズを掘り起こす。さらに、地元コミュニティメンバーによる言語資料収集では、どの程度の量・質の言語資料が収集できるのか実験する。

### 4. 研究成果

5年間で、琉球地域および日本各地で語彙研究を対象に調査・実験を実施した。その結果、消滅危機言語を対象とした場合、「時間」という制約が存在するため、限られた中で目的達成を目指すのであれば、効率性を考慮することが必要であるという結論に至り、麻生他（2022）で基本的な調査手法に関して様々な角度から評価を行った。例えば、従来の面接調査で研究者は1時間に80語程度の語彙を収集していることを示し、2000年代以降は研究者による資料収集よりも、話者自身により収集された語彙数が多くなっていることを示した（図1）。

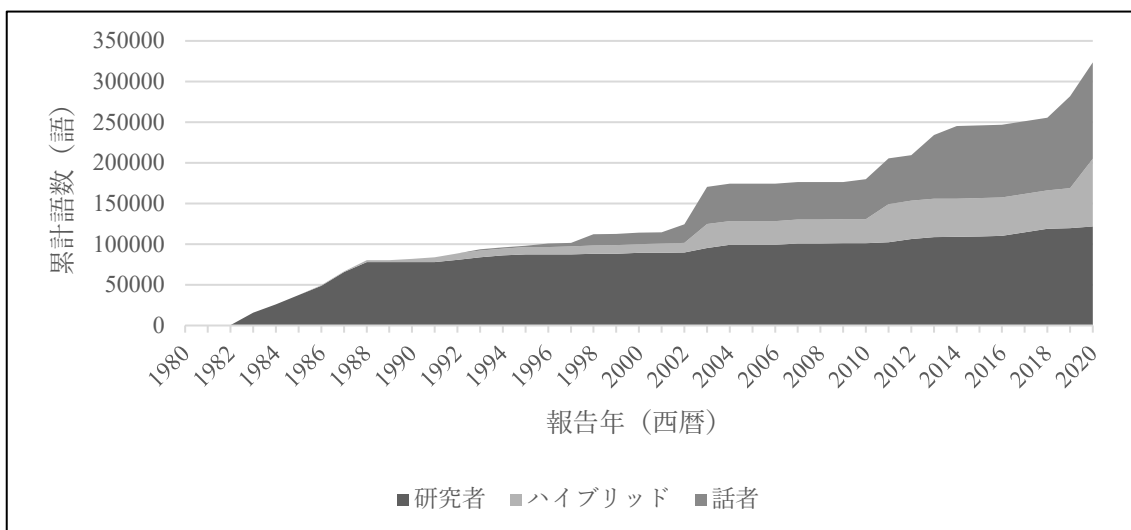


図1 1980年～2020年の間に報告された南琉球の語数（累計・研究形態別）

さらに、当該論文中で、新たに「ハイブリッド遠隔型」の調査法を提案した。まず、「ハイブリッド型」とは、従来の面接調査を用いる「研究者型」と、内省を主とする「話者型」の特徴を併せ持つ調査形態で（図2）、研究者と、話者を含む地元コミュニティメンバーが協働して行う。さらに、それをなるべく双方が居ながらにして行うのが、ハイブリッド遠隔型の調査法である。遠隔型にすることで、同時並行的に多地点での調査が可能となる。当該調査法は、効率性や大規模実現可能性の他、紙幅等を気にしないで済むウェブページなどでのデジタル公開を見据えた

録音収集法を採用しており、データの死蔵問題が解決される可能性を秘めている。小規模ではあるが、提案した調査法にて調査も実施しており、収集した語彙を語彙集という形で蓄積してきた（セリック他 2022, セリック・麻生 in press, セリック他 in press など）。

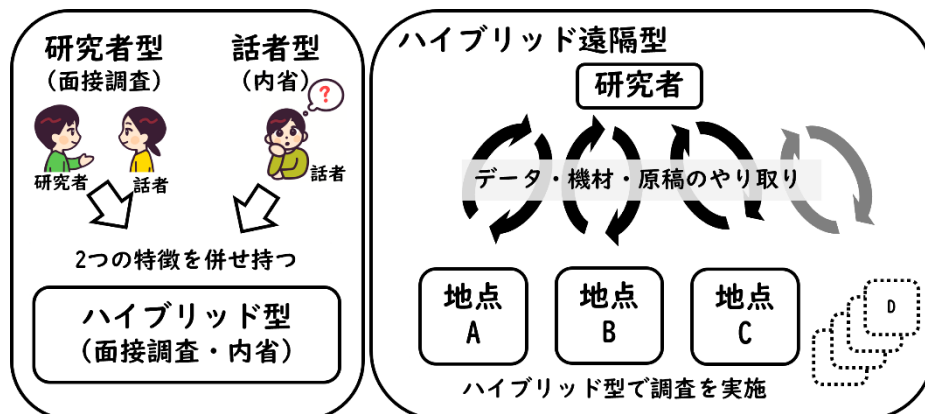


図2 各調査型のイメージ図

言語学分野でのメタ研究の動向を見ると、第二言語習得等の応用言語学の分野では2000年代から活発に行われ始めている。一方、記述言語学等の基礎研究の分野におけるメタ研究は少数である。日本の消滅危機言語を対象とした言語資料収集は必要だと学界全体で認識されているが、麻生他(2022)に至るまで調査手法の改善についてはほとんど考慮されてこなかった。本研究は、記述言語学という分野で従来の調査法の効果を定量化および評価し、同時に言語消滅期にある日本全国の消滅危機言語に対し、新たな調査手法を提案するものであると位置づけられよう。

#### 参考文献

- 麻生 玲子, セリック ケナン, 中澤 光平 (2022) 「日琉諸語の記述言語学を対象としたメタ研究の試み —南琉球諸語の過去40年間の語彙研究の評価と課題—」『国立国語研究所論集』23: 75-98.
- セリック ケナン, 麻生玲子 (in press) 「八重山語大浜方言のアクセント資料」『言語記述論集』15: ページ未詳.
- セリック ケナン, 麻生玲子, 中澤光平 (2022) 「南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント資料」『国立国語研究所論集』22: 157-176.
- セリック ケナン, 麻生玲子, 中澤光平 (in press) 「南琉球八重山語波照間方言辞典に関する中間報告」『言語記述論集』15: ページ未詳.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 セリック ケナン , 麻生玲子 , 中澤光平	4. 巻 13
2. 論文標題 明治時代の八重山語彙資料『海南諸島單語篇』の翻刻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語記述論集	6. 最初と最後の頁 139-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 セリック ケナン , 麻生玲子 , 中澤光平	4. 巻 22
2. 論文標題 南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント資料	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 157-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003519	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Lee, Seunghun J. and Aso, Reiko	4. 巻 62
2. 論文標題 The *Long-C Constraint and Word-Initial Aspirates in Hateruma Yaeyama, a Southern Ryukyuan Language	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育研究	6. 最初と最後の頁 39 ~ 47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 麻生 玲子、セリック ケナン、中澤 光平	4. 巻 23
2. 論文標題 日琉諸語の記述言語学を対象としたメタ研究の試み : 南琉球諸語の過去40年間の語彙研究の評価と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集 = NINJAL Research Papers	6. 最初と最後の頁 75 ~ 98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00003567	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 麻生玲子・中澤光平
2. 発表標題 南琉球八重山語波照間方言における母音長の音韻論的解釈
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 麻生玲子
2. 発表標題 南琉球八重山波照間方言の動詞形態論
3. 学会等名 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ASO, Reiko and Seunghun LEE
2. 発表標題 Foot structure in Hateruma Yaeyama Ryukyuan: a preliminary study
3. 学会等名 NINJAL International symposium, poster session (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 LEE, Seunghun and Reiko ASO
2. 発表標題 Building a heavy syllable with strong aspiration in Hateruma Yaeyama
3. 学会等名 16th Old World Conference on Phonology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 CELIK Kenan, NAKAZAWA Kohei, ASO Reiko
2. 発表標題 A proto-Ryukyuan Database: an aggregating model of dialectal lexical data
3. 学会等名 Methods XVII (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

なりきり！方言研究者プロジェクト <a href="https://sites.google.com/view/narikiri-linguist-pj/">https://sites.google.com/view/narikiri-linguist-pj/</a>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------